

【事業の概要】

○調査：デートDVに関する実態調査

○調査の目的：若年層の男女共同参画ならびに暴力の意識、実態を明らかにし、今後の施策のための基礎資料とする。

○調査対象：京都市域に拠点を置く大学に在籍する学生

○調査方法：大学における授業を通じた調査票の配布および回収

○調査期間：平成23年11月15日～平成24年1月15日

○有効回収数：672人（有効回収率 52.1%）

○調査内容

1. 恋愛観・価値観について
2. 「デートDV」について
3. 交際相手との関係について

◎事業の成果

本調査では、京都市域に拠点を置く大学に在籍する学生を対象に、性についての情報源や恋愛観・価値観、デートDVについての被害／加害体験、また被害を受けた場合の状況等についてたずねました。

調査の結果、全体の約6割が交際中、または交際経験があり、うちデートDVを受けたことが「ある」もしくは「少しある」と答えた割合は女性19.3%・男性16.3%であることがわかりました。

「恋愛観・価値観」では、「彼氏・彼女がいないのはかっこ悪い」と思っている男性は女性より多いこと、男女とも約3割が「つきあっている二人の間に秘密や隠し事をしてはいけない」と思っているなど、デートDVにつながりやすい意識を持っていることがわかりました。

ジェンダー観では、男女ともに社会が男女不平等だと感じていながら、子育て中は女性は家庭にいるべきとの設問に女性の3割弱、男性の半数近くが「そう思う」と回答しているなど、従前からの性別役割意識が若者たちの間にも残っていることなどがわかりました。

また、デートDVの被害／加害の体験が「ない」と答えた人の中にも、項目を詳細に分けて具体的に経験をたずねると、被害／加害体験が出てきました。これは、暴力であるという自覚が無いままに、デートDVの被害／加害が発生しているということです。

今回の調査から、デートDVの被害が一定数「ある」ということとともに、多くの学生がデートDVについて正しい知識や理解を持っていないこと、男女ともに誤った恋愛のルールに縛られていることなどが明らかになりました。

DVの防止という観点からみると、被害者の支援や加害者への処罰だけでは不十分であり、むしろ若年層のうちから、DVについての理解を深め、DVの根底にある固定的な性別役割分担意識を問い直し、相手を尊重する関係を築いていけるような教育、また被害者にも加害者にもならないための防止教育が重要です。

今回は、大学生を対象とした調査を行いました。今後は対象を高校生に広げてさらなる調査を実施するとともに、現状を把握して全市的に予防啓発に取り組んでいくための資料として、それらの結果を活用していきたいと考えています。